

中心市街地形成の土木史的理解とまちづくりへの援用

社会環境工学科 田中尚人

1. はじめに

本研究室は、都市地域計画の分野において、土木史や景観工学の知見を援用し、市民と共同したまちづくりの実践を目指している。平成17年度は、申請者が新任であることから、熊本市中心市街地を対象に、道や川などのインフラストラクチャー・デザインを理解するとともにまちづくりへの活用手法を提案するための基礎データ収集、都市イメージの把握を試みた。

そのため、まちなか工房を拠点として、一般市民や学生たちと地形レベルから現代の街並みまでの「まちの記憶」を資料収集、デザイン・サーベイなどを行い、歴史・空間の理解と地域への愛着を醸成し、今後のまちづくりに活かすことを検討した。

2. 参加型まちづくりとインフラストラクチャー史

参加型まちづくりと土木工学、とりわけ筆者らが専門としている公共空間デザインやマネジメントの基盤となるインフラストラクチャーとの関連について説明する。本研究活動は、中心市街地において川や道を基盤としたまちづくり、市民参加型公共空間デザインを念頭に置いている。「まちづくりは人づくり」と言われ、近年土木分野におけるまちづくり研究は地域の持つ魅力を高め、公共空間・社会資本整備を行うために、それぞれの地域の風土に根ざした提案、実践的な地域活動をともなうことが求められている。

これまでの研究活動、学術的知見の蓄積から、土木史的アプローチによりインフラストラクチャーが地域形成に及ぼした価値の多面性を抽出することができ、景観工学的アプローチにより市民との共同を通してコンセンサスを形成しながらの地域診断・評価が可能となることが明らかとなっている。地域住民とまちづくりを学ぶ学生との共同により、地域の方々の地域に対する理解を深め、地域固有の風土をまちづくりに結びつける意図がある。

3. 平成17年度の研究教育活動

1) 「熊本らしさ」の定義

研究協力者である熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻西英子講師の協力を得て、2研究室による合

同ゼミを4回開催した。ゼミでは「熊本らしさ」について議論し、土木と建築それぞれの分野から、都市計画、まちづくりに関するテーマをもった学生たちが主体的に活動し、合計9編（熊大3編、県立大6編）の卒業論文を提出した。また、まちなか工房を拠点としたその他の連携により地域活動にも取り組んでいる。

2) 熊本県熊本市坪井川周辺地域形成

本研究室では、先に述べたように公共空間デザイン、土木史の面から水辺をインフラストラクチャーとして取り上げ、坪井川周辺のまちづくり（図-1）に関する調査研究を行い、地域の履歴の土木史的理解を促す実践に取り組んだ。主に坪井川と周辺住民との関わりの歴史について文献・資料調査、ヒアリング調査を行い、景観、防災、環境などの面から、坪井川周辺のまちづくりのポテンシャルについて評価を行った。坪井川を対象に、政策創造研究センターのサイエンスショップも展開されており、この活動にも参加して、地域住民との交流（図-2）を行った。また、坪井川を対象に土木学会景観・デザイン研究委員会が後援するデザインコンペ「景観開花。」にも応募があった。



図-1 坪井川風景



図-2 WS参加風景

4. おわりに

本年度の活動成果としては、参加型まちづくりにおける土木史、インフラストラクチャーの役割理解の重要性について、地域住民との情報共有ができたことが大きい。また地域資産として土木史的知見をまちづくりに活かすための研究に着手できた。このように熊本市中心市街地に立地するまちなか工房は、当研究室にとって貴重な情報収集の場であるとともに、研究成果をまちへ還元しまちづくりを進める実践の場でもある。